

琉球大学学術リポジトリ

シュタイナーとフランクフルト：楽観主義と悲観主義

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部 公開日: 2020-04-06 キーワード (Ja): シュタイナー, フランクフルト, 楽観主義, 悲観主義, 快 キーワード (En): 作成者: 寺石, 悦章, Teraishi, Yoshiaki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44291

シュタイナーとフランクル 楽観主義と悲観主義

Optimismus und Pessimismus, Versuch über einen Vergleich zwischen R. Steiner und V. E. Frankl

寺石悦章

Yoshiaki TERAISHI

シュタイナーとフランクルは中心的な活動分野こそ異なるものの、その思想には多くの類似点が見出される。本稿では楽観主義と悲観主義、およびそれらに関連する快、不快、苦悩、平静などに注目して、両者の思想を比較考察する。

一般に楽観主義・悲観主義は快・不快と関連づけて捉えられることが多いが、シュタイナーとフランクルはいずれも快は結果として生じるものであって目標ではないとする。そして快・不快に基づいて人生を考えること、快を目標として捉えること自体が誤りだと指摘している。また快・不快の比較については、比較自体はどうか可能かもしれないが、人間の行動には本来、影響を与えないと主張している。

フランクルは苦悩を重視し、苦悩に耐えることによって人間は成長すると考えている。これに対しシュタイナーは平静の重要性を指摘する。ここでの平静とは「苦悩しないこと」「苦悩せずに済ませること」として理解することも可能だが、そこに至る過程においては苦悩に耐えることが必要になる。この点からすれば、フランクルが語る苦悩とシュタイナーが語る平静には、重なる部分が大きいといえそうである。

フランクルもシュタイナーも、自らの立場を楽観主義だと明言しているわけではない。ただし楽観主義を「人生あるいは未来に希望を見出す立場」といった形で捉えるならば、両者とも楽観主義の立場を取っていると判断して差し支えないと思われる。

キーワード： シュタイナー フランクル 楽観主義 悲観主義 快

1 はじめに

シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861~1925) とフランクル (Viktor Emil Frankl, 1905~1997) の思想には多くの類似点が見出される。筆者はまず、両者の思想の比較研究を行うための基盤づくりを行った上で¹、精神 (Geist) と心魂² (Seele) をめぐる両者の思想について³、続いて死と不死をめぐる思想⁴、再生をめぐる思想について検討した⁵。それらの成果を踏まえ、本稿では楽観主義 (Optimismus) と悲観主義 (Pessimismus)、およびそれらと関連する快 (Lust)・不快 (Unlust)・苦悩 (Leiden)・平静 (Ruhe) などについての両者の思想を取り上げて比較考察する。

楽観主義・悲観主義は、快・不快と関連づけて語られることが圧倒的に多く、一般にも楽観主義は「人生には快が多いと考える立場」、悲観主義は「人生には不快が多いと考える立場」と捉えられているように思われる⁶。また苦悩や、快・不快から距離を置いた平静という状態が、楽観主義や悲観主義

¹ [寺石 2016]。

² 「心魂」というあまり一般的でない語を使用するのは、「精神」や「身体」と同様に漢字二文字で音読みになるので収まりがよいこと、また直前に付加語を置きやすい(「○○の心魂」など)といった実用的な理由が大きい。またこの語が Seele、さらにはギリシア語の *psychē* に対応すること含意しやすいといった理由もある。

³ [寺石 2017a]。

⁴ [寺石 2017b]。

⁵ [寺石 2018]。

⁶ ちなみにシュタイナーは楽観主義を次のように要約している。「世界とは存在しうる最上のものであり、この世界での営みや行為には計り知れない価値がある。すべてが調和的に、そして合目的に協働していて、驚嘆に値する。見かけ上は悪や不幸に見えるものでも、一段高次の観点からは善として認識されうる。なぜならそれらは善をうまく引き立たせているからである。悪を克服すると、善をより正しく評価できる。不幸も真の意味では現実ではない。不幸がより少ないと不幸と感じるだけである。不幸とは善の不在であり、それ自身には意味がない」([PF, 172] [シュタイナー2017, 206])。また悲観主義については次のように要約している。「人生は苦悩と悲惨さに満ち、あらゆるところで不快が快を、苦しみが喜びを凌駕している。存在とは重荷であり、あらゆる状況において、存在より非存在が望ましい」([PF, 172] [シュタイナー2017, 206])。

と関連することは説明するまでもないであろう⁷。

両者とも悲観主義的立場に対しては厳しい批判をしており、その立場が誤りだと明確に否定しているように見える⁸。また両者とも、どんな人生にも意味があると考えているという点では、楽観主義的と言えそうである。とはいえ管見の限りでは、フランクもシュタイナーも、自らの立場を楽観主義だと明言しているわけではない。また快を軽視するなど、単純に楽観主義とはみなしにくい態度をとっていることもまた事実である。

2 快は目標ではない

前述の通り、楽観主義と悲観主義は快・不快と関連づけて語られることが圧倒的に多い。また仮に楽観主義・悲観主義のことを脇に置いたとしても、通常、誰もがより多くの快を望んでおり、またより少ない不快を望んでいる（そして自分でもそう思っている）といって差し支えない。快を求め、不快を避けようとするのは、ごくあたりまえの態度であり、何ら特別なことではない⁹。このようなことから、人間は（あるいは人生は）快を求めるものだという理解が生じるのも、ごく自然ななりゆきである。その場合、人生の目的は快の追求だと理解されることになる。

しかしフランクとシュタイナーはいずれも、快・不快に基づいて人生を考えること、快を目標として捉えること自体が誤りだとする。そして両者とも、快は結果として生じるものであって、目標ではないと主張している。

⁷ 後述するように、このうち「苦悩」はフランクが、「平静」はシュタイナーが重視するものである。

⁸ フランクの立場については本文中で触れることになる。シュタイナーは『自由の哲学 (PF)』第13章において、楽観主義の代表としてシャフツベリ（下記参照）とライプニッツ (Wilhelm Leibniz, 1646~1716)、悲観主義の代表としてショーペンアウアー (Arthur Schopenhauer, 1788~1860) とエドゥアルト・フォン・ハルトマン (Karl Robert Eduard von Hartmann, 1842~1906) の名前を挙げている。この章の大半が悲観主義に対する批判、中でもエドゥアルト・フォン・ハルトマン説に対する批判に費やされている。なお、ここで名を挙げられているシャフツベリは、第3代シャフツベリ伯爵であるアントニー・アシュリー＝クーパー (Anthony Ashley Cooper, 1671~1713) のことだと思われる。

⁹ 快が多ければ一般に人生は楽しくなり、楽観主義の立場を取りやすくなると考えられる。

これらの点について個々に見ていくことにしよう。

2.1 フランクル

誰もが不快よりも快を望む。また快の数や量は少ないよりも多い方がよい。快が多ければ多いほど人生は楽しい。これらのことを否定するのは難しい。そこから人生の意味は快にある、快を獲得することにあると考える人は少ない。しかしフランクルは、それは間違った思い込みだと指摘する。彼は「人生のすべての意味は本来ただ快にあるのだ」という主張に対し、そのような主張は「人間のすべての行為は結局のところ快原則（Lustprinzip）によって規定されているという誤った事実認識を根拠にしているのである」と述べている¹⁰。

とはいえ日頃、我々は快を望み、不快を避けてはいないだろうか。素朴に考える限り、我々は快を求めて行動しているように思える。その点からすれば、フランクルの指摘には納得しがたい面がある。

フランクルは、人間は快を目標に行動してはしないと主張する。というのも彼によれば、そもそも快を目標にすること自体が不可能だからである。快とは（快ではない別の＝本来の）目標に到達することによって、そのことの結果として生じるものに他ならない。

快は、いつもおのずから生じる、つまり、目標に到達することによっておのずから生じるのです。快は結果として生じるものであって、目標として追求されるものではありません。快は、「結果として生じる」だけで、志向されることのできないものです¹¹。

本来の目標に到達した場合、その結果として快が生じるというのがフラン

¹⁰ [ÄS, 77] [フランクル 2011, 93-94]。

¹¹ [LM, 178] [フランクル 2004, 46]。また次のようにも述べている。「しかし、われわれの考えでは、快原則は心理学的な人工物にすぎない。実際には、快は総じてわれわれの独力の目標ではなく、努力が実現されたことの結果なのである」([ÄS, 78] [フランクル 2011, 94])。

クルの説明である。到達しなければもちろん快は生じない(不快が生じる)。ここでの快は、到達したことによって生じるものである。目標に到達することによって、いわば「たまたま」生じるのであって、快そのものを目標にしているわけではない。人が追求しているのはあくまでも意味であって、意味を追求した結果として快が生じているのである。

たとえば何らかの競技で優勝した人は、それによって(一般に)快が得られると考えてよいだろう。しかしその人はそのような快のために努力したわけではなく、優勝するために(あるいは「全力を出し切るため」「自分の中で最高の結果を出すため」等の場合もある。以下においても同様)努力したはずである。優勝することに意味があると考えて努力した可能性が高い。この場合、快は優勝の結果として生じたものだと考えらえる。

このようなフランクルの主張は、たしかにもっともに聞こえる。しかし現実には快を目標に行動する人が少なからず存在するようにも思える。この点をフランクルはどのように考えるのだろうか。

フランクルもそのような人がいること自体は認めている。ただし、それは正常な状態ではないと指摘する¹²。彼によれば、正常な状態であれば快を目標にすることはない。では、正常と思われる人が快を目標にするような場面はないのだろうか¹³。それについては、次のような発言が参考になるだろう。

いや、それだけではありません。快とはいつても、まさにそれが志向されるその時、すでにもう取り逃がしてしまうようなものでもあるのです¹⁴。

眠ろう、眠ろうとする人が、かえって眠れないのと同様、快を求める人は、快を取り逃がしてしまう¹⁵。快を目標にすることまでは可能かもしれないが、実はそれによって快を取り逃がしてしまうというのである。

¹² 「快原則は、心理学的原理ではなく、病理的原理なのです。もし快原則が妥当することがあるとすれば、それは正常な心的事象の場合ではなく、病的な心的事象の場合なのです」 ([LM, 178] [フランク 2004, 46])。

¹³ 一時的に異常な状態に陥っているという解釈も可能ではある。

¹⁴ [LM, 178] [フランク 2004, 46]。

¹⁵ [LM, 178] [フランク 2004, 46]。

フランクフルは快・不快を目標にするという理解がいかに奇妙なものであるかを、例をあげて説明している。ある悲劇を見るために劇場に行った人がいるとする。単純に考えれば悲劇の内容は不快である。したがってその人は、不快を引き起こすために劇場に足を運んだことになる。しかしこれについて、「その人の目標は、舞台上の悲劇的な出来事を見て何らかの不快を引き起こされることだ」と理解するのは誤りであろう¹⁶。また次のようにも述べている。

たとえばナポレオンがいくつもの会戦を戦い抜いたのは、ただその無敵の戦果によって快を手に入れるためであったということが仮に事実だとすれば——ちなみに他の兵士ならば、これと同様の快をもっと簡単に、たとえば食べたり飲んだり売春宿に行ったりすることによって手に入れることができた——最後のナポレオン戦争の「最終目標」、ナポレオンの敗戦の「最終目標」は、勝利が快をもたらしたのと同じく、敗北によってもたらされる不快にあったということにならざるをえないであろう¹⁷。

結果として生じたはずの快・不快を目標とみなすのであれば、この場合、ナポレオンは敗北による不快を最終目標にしていたという、非常に奇妙な結論を導かざるを得なくなる。

フランクフルにとって、大切なのは常に意味である。前述の通り、快を目標にする状況は、フランクフルにいわせれば異常な状態ということになる。それを踏まえて、次のように述べる。

というのは、正常な場合には、本来、人間にとって問題なのは決して単なる快ではなく、つねに意味であるからです¹⁸。

¹⁶ [ÄS, 79] [フランクフル 2011, 95]。

¹⁷ [ÄS, 79-80] [フランクフル 2011, 95-96]。

¹⁸ [LM, 178] [フランクフル 2004, 46]。

2.2 シュタイナー

シュタイナーも快を目標として見るのは誤りであり、快は結果として生じるものだとしている。基本的な主張はフランクと同様と見てよいであろう。ここではシュタイナーによる悲観主義をめぐる議論に目を向けることにしよう。

彼が批判する学説の中に次のようなものがある¹⁹。快が生じたとしても、その快によってさらなる快を追い求めることになる。その場合、さらなる快の追求が生じてしまうため、欲求が満たされることはない²⁰。したがって、上記の状態は快ではなく不快だという。短くまとめれば、「快を求めること自体が不快である」とする見解である。これに対する批判の中で、彼は次のように述べている²¹。

そうした追求が満たされると快が、満たされないと不快が生じる。ここで重要なのは、追求が成功するかしないかによって快か不快かが決まる点である。追求そのものは、けっして不快ではありえない。追求が成功するとすぐにまた新たな追求に向かう。その点がわかると、快が不快に変わるなどはけっして言えない。

快か不快かは追求が成功するかどうかで決まる。追求が成功すれば快が、そうでなければ不快が生じる。フランクの主張と同様、快・不快は結果として、いわば「たまたま」生じるものである²²。だとすれば追求そのもの、

¹⁹ シュタイナーはショーペンハウアーの説として紹介している（〔PF, 175〕〔シュタイナー2017, 210〕）。

²⁰ 「ある目標が達成されると、新たな欲求が生まれ、それが延々と続くからである。得られる満足はいつでもつかの間でしかない。そのつかの間以外は、人生のすべてが満たされぬ衝動、不満足、苦悩なのである」（〔PF, 173〕〔シュタイナー2017, 207-208〕）。

²¹ 〔PF, 175〕〔シュタイナー2017, 210〕。

²² 欲求の充足では快が生じ、非充足では不快が生じるという傾向は、一般には存在する。ただしシュタイナーによれば、「快とは欲求の充足であり、不快とは非充足である」と単純に結論するのは誤りである。なぜなら欲求の結果と関わりなく、快や不快が生じることがあるからである。たとえば病気とは、それ以前に何の欲求もない不快である（〔PF, 177〕〔シュタイナー2017, 212〕）。

追求すること自体は不快ではないはずである。それによって新たな快が生じ、またそれを追求するからといって、すでに生じた快が不快に変わるわけではない。生じた快はあくまでも快のままのはずである。

本当に追求そのものが不快の原因だといえるなら、その反対のこともいえるはずである。すなわち「非追求は快を生むはずであろう」とシュタイナーは指摘する²³。

また「満足の追求とは、生の内実に向けての生産活動の拡大である²⁴」。その点から見ても、追求それ自体が不快という捉え方はおかしい。それどころか、現実を見ると、むしろその反対が正しいとシュタイナーは主張する。

追求（欲求）そのものが喜びなのである。遠くにあっても強く望まれている目標への期待感が喜びを与えてくれることは、誰もが知っている。……（中略）……この快は、目標の達成いかにかわらず存在する。

目標が達成されると、追求に伴う快にさらに実現の快が付け加わる²⁵。

追求すること自体が喜びだからこそ、我々は追求する。追求の際は、目標への期待感が喜びを与えてくれる。その点からすれば、追求はむしろ快であって、不快であるとはとうてい言えない。

ただし注意が必要なのは、ここで喜び・快といているのは、これまで論じてきた目標としての快・不快ではないという点である。したがって追求そのものに快が伴うとしても、快が目標になると主張しているわけではない。フランクフルもシュタイナーも、快を目標として捉えること自体が誤りであって、快は目標にはならないと主張している点で一致している。

3 快と不快の比較

繰り返しになるが、一般に楽観主義は「人生には快が多いと考える立場」、悲観主義は「人生には不快が多いと考える立場」と捉えられているように思

²³ [PF, 176] [シュタイナー2017, 211]。

²⁴ [PF, 175] [シュタイナー2017, 210]。

²⁵ [PF, 176] [シュタイナー2017, 211]。

われる。ここでは快と不快の比較が行われている。

すでに見たように、フランクとシュタイナーは快を目標として捉えるのは誤りだとしている。だとすれば、そもそも目標ではないのだから、「快が多いから人生は生きるに値する」「不快が多いから人生は生きるに値しない」といった考えも成り立たないことになる。したがってこのような根拠に基づく限りでの楽観主義、悲観主義はいずれも成立しないはずである。

とはいえ、快と不快のどちらが多いかという比較は(漠然とした形ではあるが)一般にもしばしば行われている。フランクやシュタイナーの見解を前提にすれば、(そのような比較にどれだけの意味があるかという問題は生じるとしても、)比較そのものは上記とは独立に成り立つ可能性がある。

以下で見るように、この点に関するフランクとシュタイナーの態度は、根本的には共通している。それは、快・不快の比較は可能かもしれないが、本来、人間の行動には影響を与えない、というものである。これについて個々の主張を見ていくことにしよう。

3.1 フランク

フランクは心理学主義の立場²⁶に立った場合、「あらゆるものは……(中略)……均一的にな」としている²⁷。彼は人間を、精神・心魂・身体という三つの要素から構成されたものと捉え、その中心となるのは精神だとしている²⁸。しかし現代社会ではこの精神の存在そのものが無視されており、その結果としてニヒリズムがはびこっている。精神という深いレベル、根源的なレベルに目を向けようとせず、すべてを心魂というより浅薄なレベルで捉

²⁶ 「ニヒリズムが実在をどのような抽出物に還元するか、あるいは実在をどのような抽出物から演繹するかに応じて、主にニヒリズムの三つの変種ないし別種が区別されます。つまり身体的現実への還元がなされるなら、ニヒリズムは生理学主義の形で現れます。それに対して、心理的現実への還元がなされる場合は心理学主義の装いで、また社会学的現実への還元がなされる場合は社会学主義の装いで現れます。

……この三者が世界を見ると、その視野をそれぞれ一つの存在層に、すなわち身体的存在、心理的存在、社会的存在に限っています。そしてまさに精神的存在を無視します」 ([LM, 163] [フランク 2004, 11・12])。

²⁷ [LM, 177] [フランク 2004, 45]。

²⁸ [寺石 2016] [寺石 2017a] 参照。

えてしまう心理学主義も、そのような状況下で生じていると فرانクル は見る。それによって次のような事態が生じているという。

志向作用の超越的対象である精神的客体が犠牲にされるやいなや、例えば、客観的価値のうちで残るものは何もなくなり、残るのは主観的快楽だけになります。念を押しますが、残るのは、同じ一つの快、等しく一妥当する〔取るに足りない〕快だけなのです。このような〔心理学主義的〕考察によって残される、この、いつでもどこでも同一の快は必然的に一つの平準化を伴っています。世界はその深みの次元を失い、現実はその価値の起伏を失ってしまうのです²⁹。

精神が無視されることにより、快は単なる快となり、深みや意味が失われ、平準化されてしまう。先に挙げたナポレオンの例でも、「たとえばナポレオンがいくつもの会戦を戦い抜いたのは、ただその無敵の戦果によって快を手に入れるためであったということが仮に事実だとすれば——ちなみに他の兵士ならば、これと同様の快をもっと簡単に、たとえば食べたり飲んだり売春宿に行ったりすることによって手に入れることができた……」と述べられている。ここではナポレオンが会戦において得た快は、他の兵士は「食べたり飲んだり売春宿に行ったりすることによって手に入れることができた」ものとされている。我々が求めているものがこのような快だとすれば、人生は無意味なものにならざるを得ないだろう。

ところでフランクルの意図に反することにはなるが、快が平準化されていれば、むしろ比較（計算）はしやすいのではないかと、いったことも考えられる。そのような態度、いわば快・不快の「貸借対照表」を想定することに対し、彼は次のように述べる。

ふつう、貸し方には、すべての悲しみと痛みがおかれます。借り方には、これまで恵まれなかったすべてのしあわせがおかれます。けれど

²⁹ [LM, 177] [フランクル 2004, 45]。

も、この決算は、根本から間違っています。というのは、よくいわれることですが、人間は「楽しみのために生きているのではない」からです³⁰。

フランクは、快・不快の貸借対照表を作成することまではどうにか可能と考えているらしい。しかしそのような計算は根本的なところで間違っている。そもそも楽しみのため、快のために人間が生きているわけではないから、そのような比較をすること自体、無意味なことだと言わざるを得ない。

すでに別稿で論じたことだが³¹、フランクは「未来はわからない」ことを根拠にして、自殺することが間違っているという指摘をしている。この点について、この議論に関連する範囲で繰り返しておこう³²。

フランクは自殺を決心するにいたる理由を四つに分けて考察している³³。そしてその中でほんとうに考察すべきは、いわゆる決算自殺であるという。決算自殺とは、人生のプラスとマイナスを全体として考え（決算し）、それを理由に自殺することをいう。簡単にいえば、人生は「不快なことばかりだ（不快なことが圧倒的に多い）」といった理由による自殺である。

このような自殺をする人は、しばしば未来が確定している（「たとえば今後も不快ばかりが続く」）かのような考え方をする³⁴。しかしそのような考え方は間違っている。なぜなら人間は未来を知ることができないからである。

³⁰ [SWL, 86] [フランク 1993, 22]。

³¹ [寺石 2017b]。

³² 本稿の論旨に合わせ、適宜、表現を変更している。

³³ 「自殺を考察するなら、自殺を決心するにいたる、四つの本質的で、かつ本質的に異なった理由を区別しなければなりません。第一に、自殺は、もともと心理状態の結果ではなく、身体状態の結果であることがあります。……(略)……第二に、周囲の人たちへの効果を計算して、自殺の決意を固める人たちがいます。……(略)……第三に、とにかく疲れたと感じ、生きることに疲れて死のうと思う人たちがいます。……(略)……私たちがほんとうに考察しなければならないのは、つぎの第四のグループです。そのグループの人たちは、要するに、さらに生きていく意味、そもそも生きている意味がまったく信じられないという理由で自殺しようとしています。こういう動機でなされる自殺は、ふつう、決算自殺とよばれます」([SWL, 85-86] [フランク 1993, 19-21])。

³⁴ 「実際に計算してみると不快の方が多し」といった主張する研究者(学者)がいることは、フランク自身が指摘している。「その学者がかつて示したところによれば、普通の人間は、一日を平均すれば、快よりも不快の方を比較にならないほど多く体験するということである」([ÄS, 81] [フランク 2011, 97])。

どれほど不快なできごとが続いたとしても、人間に未来が確実に予測できない限り、次の瞬間に素晴らしいできごとがないと断定することはできないはずである³⁵。彼は次のように述べる³⁶。

自分の確信が客観的でもあり、また正当なものであるかどうかということをも前もって知ることのできる人間はいない。次の瞬間に——すなわち自殺すればもはや体験することのない次の瞬間に——生じる出来事によって、自分の確信が正しくなかったことが証明されるかもしれないことを予め知ることのできる人間はないのである。

「人生は不快なことばかりだ」とどれほど強く思ったとしても、次の瞬間にそれが覆される可能性がある。その意味では、「人生は不快なことばかりだ」といった確信は、少なくとも未来に関しては十分な客観性があるとはいえない³⁷。これらは直接には決算自殺について語られたものだが、その論拠は決算自殺のみではなく、さまざまな事柄に適用可能なものとなっている。過去をどれほど精密にチェック（決算）したとしても、それは未来を絶望する根拠にはなりえない。これがフランクルの主張である。

この主張を敷衍すれば、次のように言うことができるだろう。つまり過去における快・不快を比較することは可能かもしれない。また、それは過去に関して正しいかもしれない。しかしそれを根拠に未来を語ることは絶対にできない。過去について、「快が多かった」「不快が多かった」ということまでは言えるとしても、それを根拠に今後の人生、未来を語るのは誤りという

³⁵ フランクルは次のような例をあげている。終身刑の判決を受けた黒人が船で運ばれているときに火災が発生する。並外れた体力をもつ彼は手錠をはずされ、10人の生命を救い、その功績によって恩赦される。フランクルは、彼が波止場にいるとき（船に乗る前）に、この人生に意味があるなどとは思わなかったはずだと述べている（〔ÄS, 103-104〕〔フランクル 2011, 126-127〕）。

³⁶ 〔ÄS, 99〕〔フランクル 2011, 121〕。

³⁷ 「ところで、人間がはたして十分な客観性をもって人生の決算を行うことができるかどうかは疑問である。このことはとくに、もはや逃げ場がない状況に追いこまれ、自殺だけが唯一の逃げ場である、と主張される場合に当てはまる。たとえこの主張がどれほど強い確信に基づくものであったとしても、その確信は主観的なものとどまる」（〔ÄS, 99〕〔フランクル 2011, 120〕）。

ことになる。

3.2 シュタイナー

シュタイナーが「快と不快の比較」についての議論を集中的に行っているのは、エドゥアルト・フォン・ハルトマン（Karl Robert Eduard von Hartmann）の学説への批判においてである³⁸。彼はその批判の中でフランクと同様、自殺について言及している。

さて、自殺者の数は勇気を持って生き続ける人に比べればかなり少ない。不快のために人生を閉じるのはごく限られた人たちだけである。ここからどのような結論が得られるだろうか。不快が快よりも量的に多いというのが間違っている、あるいは、私たちが生き続けるにあたって快・不快の量は重要ではないという結論になる³⁹。

現代社会においては、一概に自殺者が少ないとは言い切れないかもしれない。とはいうものの、生き続ける人の総数と比較する限りでは、自殺者はごくわずかだと言って差し支えないはずである。ここから導かれるのは上記のような二つの可能性である。

一つは「不快が快よりも量的に多いというのが間違っている」というものである。ここでの論旨に沿った形で、「人生あるいは未来に（さほどの）希望を見出さない立場」を悲観主義と呼ぶとすれば、そのような悲観主義はほぼ成り立たないと言えそうである。

もう一つの可能性は「私たちが生き続けるにあたって快・不快の量は重要ではない」というもので、シュタイナーの真意はこちらにあると考えられる。

³⁸ エドゥアルト・フォン・ハルトマンが、快の尺度は感情だと言いながら理性的な評価を価値基準にしている点、量のみを問題にすべきだとしながら、実際には質を考慮している点など種々の批判が述べられているが、それらについては本稿では立ち入らない。

³⁹ [PF, 182-183] [シュタイナー2017, 219]。

シュタイナーは「欲求・衝動が快によって計れるだろうか」という疑問を示す。たとえば飢えた人は空腹を満たそうとする。そして満腹すれば（あるいは食べ物を食べている過程では）快が生じる。とはいえ空腹であっても、すぐその後に御馳走が確実に待っていることがわかっていれば、その人は空腹のまま待ち続けるのではないだろうか。だとすれば、空腹であることが満腹という快のきっかけになっているといえることができる。したがって単純に空腹を不快として計算するわけにはいかなくなる。

私たちは快の量とではなく、欲求の大きさと不快の量を比べている。……（中略）……子どもを欲しがっている女性は、子どもを得ることで与えられる喜びを、妊娠、出産、子育てなどから生じる苦しみと比較したりはせず、子どもが欲しいという欲求と比較する⁴⁰。

我々はつい快と不快を比較してしまいがちであり、あるいは実際にそうしていると考えてしまいがちだが、得られる快・不快のいずれが大きいかは問題ではないという。実際に問題になるのは、目標に向けられた欲求とそれに対する障害という不快のどちらが大きいか、なのである。つまりは快と不快の比較ではなく、欲求と障害、あるいは欲求と（障害という）不快の比較である。欲求より障害が大きければ不快が不可避となり、やる気を失ってそれ以上は続かなくなるだろう⁴¹。しかしそうでない限りは、人は欲求に従って行動する。

人は（意識されない場合も多いが）何らかの人生目標をもっていると考えられる。そしてそれを達成したいという欲求をもっている。先に言及した自殺についても、そのような欲求と障害の関係として捉えることができる。

そして人間も、（その根拠が正当か不当かは別にして）追求に値する人生目標を達成できないと思うと、自殺に走るのである。しかし追求に

⁴⁰ [PF, 189] [シュタイナー2017, 226]。

⁴¹ [PF, 190] [シュタイナー2017, 227]。

値する何かを達成しようと信じているかぎり、彼はあらゆる苦悩や苦しみと闘う。本来人間は、欲求充足に必然的に伴う不快がどれほど大ききとも、それに耐えられるときには、欲求の対象を手に入れようとする。

ところで、ここでシュタイナーは快と不快が比較できるという立場で論じているように見える⁴²。そして実際に次のようにも述べている。

さて、いかなる快・不快にも特定の大きさ（強さと持続）がある。種類の異なる感情の大きさを、最低限、推定的ではあっても比較することはできる。上質なタバコとうまい冗談のどちらがより楽しめるか、私たちにはわかる。種類の異なる快・不快を大きさにおいて比較できる点に反論の余地はない⁴³。

ここでは（「最低限、推定的であっても」という限定つきだが）快・不快を大きさにおいて比較できること自体は容認していると見ることができる。また大筋では一般にも、広く認められているといえる⁴⁴。その上で、「しかし、この計算の結果が人間の意志に何かしらの影響を与えるという主張は誤りである⁴⁵」と述べている。ただし、このような態度はシュタイナーの真意ではないらしい。

先に「追求が成功するかどうか」で快か不快かが決まると述べたが、よく考えてみると、達成できなかったことが不快になるとは、かならずしもいえないという事実に気づく。シュタイナーはこのように述べる。

⁴² 快と不快から欲求と不快（障害）という形に変更されているが、そもそも快と不快の比較という文脈から生じたものであり、快と不快の比較が可能という立場でしばらく議論が行われている（〔PF, 172-186〕〔シュタイナー2017, 206-222〕）。

⁴³ 〔PF, 193〕〔シュタイナー2017, 229-230〕。

⁴⁴ たとえば、子どもに「おやつと宿題、どっちがいい？」と尋ねれば、ほぼ全員がおやつを取るだろう。（一般におやつは快、宿題は不快である。）これはまったく質の違うものでありながらも、それを比較していると理解することが可能である。

⁴⁵ 〔PF, 192-193〕〔シュタイナー2017, 230〕。

希望が失われた瞬間に「やるべきことはやった」と叫ぶ人がもしいたら、それがこの主張の正しさを証明している⁴⁶。

そして、これに同意できない人は「ベストを尽くしたという至福の感情を見逃している」と指摘する⁴⁷。各々の人生を振り返れば、希望が失われても、そのために行為した、そのために努力したことで一定の満足を得られる場合があることは、大半の人が経験済みであろう。

快・不快のどちらが優勢かは問題にならず、快への意志が不快を克服するだけの強さがあるかが問題なのである。この主張が正しいことは、いわゆる棚からぼた餅的に与えられる快よりも、大きな不快を代償に得られた快の方が高い評価値を得ることが証明している⁴⁸。

ここでは文脈上、快と不快の比較になっているが、欲求と不快（障害）に置き換えても、主張していること自体は基本的に変わらない。

あらゆる困難を克服した後には可能となる満足を目指して人は努力する。この満足感への希望が行為の根幹なのである⁴⁹。

シュタイナーはたしかに快・不快の比較を認めてはいるものの、現実にはすべてが量で計れる、量で論じられるとは考えていない。現実の快、あるいは欲求には質の違いもあり、単純に差し引きできるものではない。そのことは次の発言で確認できる。

私たちは特定の大きさを持つとされる抽象的な快を得ようとするのではなく、具体的な欲求を特定のやり方で満たそうとする。……（中略）

⁴⁶ [PF, 176] [シュタイナー2017, 212]。

⁴⁷ [PF, 176] [シュタイナー2017, 212]。

⁴⁸ [PF, 190] [シュタイナー2017, 227]。

⁴⁹ [PF, 193] [シュタイナー2017, 230]。

……別の対象や別の知覚が得られても、快の量が同じだという理由で満足することはない。……(中略)……欲求の充足をある特定のやり方で求めているので、その快を上回る不快を対価として支払っても、成就した時には快が得られる。……(中略)……不快を快と同質と考えて、量的に足し引きすることはありえない⁵⁰。

このようにフランクとシュタイナーはいずれも、快・不快の比較はどうか可能かもしれないが、それは本来、人間の行動には影響を与えないと主張している。

4 苦悩と平静

これまで見てきたように、フランクもシュタイナーも快は行為の目標ではないとしており、また快と不快の比較は行為に影響を与えないと主張している。端的にいえば、フランクもシュタイナーも快と不快そのものについては、さほど重視していないといってよい。

その代わりというわけではないが、快・不快と密接な関連があるものの中で、特にフランクが重視するのは「苦悩 (Leiden)」である。シュタイナーの場合、端的にそれに対応するものがあるわけではないが、「平静 (Ruhe)」の果たす役割がそれに近いように思われる。以下ではフランクにおける苦悩、そしてシュタイナーにおける平静について見ていきたい。

4.1 フランク

人間は経験を積むことで成長・進歩するというのが、フランクとシュタイナーに共通する基本的な態度である。ここで経験と述べたが、フランクの場合、苦悩の経験を積むことを特に重視する。彼は苦悩に大きな意味を見出しており、人間とは苦悩するものに他ならないと考える。現生人類を知恵ある人、ホモサピエンス (homo sapiens) と呼び、あるいは経済合理主義的な人間をホモエコノミクス (homo economicus) と呼ぶ。フランクはこれ

⁵⁰ [PF, 189] [シュタイナー2017, 226]。

にならない、人間とは苦悩するものであり、ホモパティエンス (homo patiens, 苦悩人) なのだと述べる。

そこで人間に開示されるものは、人間存在が最深かつ最終的に受苦であるということ、人間の本質は苦悩する人間、ホモパティエンス (苦悩人) であるということです⁵¹。

通常、苦悩を喜ぶ人はいない。苦悩は避けられるなら避けたいものだと誰もが思う。しかしフランクフルは、苦悩すること自体に大きな意味があり、それによってこそ人は成長すると主張する。苦悩にはそれだけの価値があるというのがフランクフルの立場である。彼は「私たちはここで、正しい、毅然とした苦悩は業績であるということを確認しておきたいと思います⁵²」「苦悩は業績であり、成長です。しかしまた苦悩は成熟でもあります⁵³」などと述べている。

フランクフルによれば、苦悩は人間の成長にとって必要不可欠なものに他ならない。したがって苦悩をなくすといったことは (仮にそれが可能だとしても) やってはならないことである。

けれども、私たちは、自己放棄という代償を払ってまで人間を苦痛から解放してはならないのです。もしも徹底的に不快が削減されたり、徹底的に苦痛が制圧されるようなことがあれば、つまり、実存的に有意義な苦悩がその背後に秘められている不快や苦痛までもが制圧されるとすれば、それは自己自身を放棄してしまうに等しいでしょう。そのとき、人間は苦痛とともに自己自身をも失うことになりかねません⁵⁴。

⁵¹ [LM, 208] [フランクフル 2004, 133]。また次のようにも述べている。「この生物学的人間像に対して、私たちは精神学的人間像を掲げたいと思います。知性人に対して苦悩人を対置させたいと思います」 ([LM, 209] [フランクフル 2004, 135])。

⁵² [LM, 205] [フランクフル 2004, 125]。

⁵³ [LM, 207] [フランクフル 2004, 130]。

⁵⁴ [LM, 169] [フランクフル 2004, 24]。

フランクルの学説の中でも特に有名な「三つの価値」なるものがある。創造価値、体験価値、態度価値の三つであり、最後の態度価値をフランクルがとりわけ重視していることはよく知られている。

態度価値とは、「人間が自分の制限された生活に対して取る態度によって実現されるものである⁵⁵」。これに相当する具体的な状況は多様だが、フランクルが挙げる例などを考慮すると、その典型といえるのは大きな苦痛を伴う状況だと考えられる。この点からすれば、ここでいう態度価値とは苦悩することにおおよそ置き換えることが可能になる。フランクル自身が次のように述べている。

最後の、価値実現の第三の可能性は、苦悩すること、つまり存在に耐えること、運命に耐えること、にあります⁵⁶。

そして苦悩に直接関わる態度価値には、他の二つの価値にはない特別な重みがあるとフランクルは考える。

それゆえ、[前の二つの価値可能性からの] 撤退が避けられないということは、最高の意味と価値の可能性に向けて突き進むことができるということを意味しているのです。それはまさに苦悩だけに秘匿されている可能性なのです⁵⁷。

創造価値も体験価値も態度価値も、それぞれが価値を生み出している。しかし前二者が生み出す価値には限界がある、可能性が限られているのに対し、態度価値が生み出す価値には限界がない、可能性が無限だとする。このような点からも、態度価値は特別のものとして扱われていることがわかる。

⁵⁵ [ÄS, 93] [フランクル 2011, 113]。諸富祥彦は「これは、自分自身ではどうしようもない状況、変えることのできない運命に直面した時、その窮状に対してある態度を取ることによって実現される価値のことです」と説明している（〔諸富 1997, 118〕）。

⁵⁶ [LM, 203] [フランクル 2004, 119]。

⁵⁷ [LM, 203] [フランクル 2004, 119]。

創造も体験も、その価値可能性は限られているでしょうし、汲みつくされもするでしょう。ですが、苦悩を意味で満たす可能性は無限なのです⁵⁸。

苦悩を体験するという事は、苦悩に耐えることでもある。したがって態度価値を実現するためには、苦悩する能力、苦悩に耐える能力がどうしても必要である。フランクフルはそれを端的に苦悩能力 (**Leidensfähigkeit**) と呼んでいる。

それに対して、態度価値を実現するために必要なのは創造能力だけでも体験能力だけでもありません。苦悩能力も必要なのです。ところが、この苦悩能力は人間が「持っている」ものではありません。誰かがゆりかごの中に入れてくれたものではありません。人は感覚器官を持っていますし、才能も少なくとも持つことができるものです。ところが、苦悩能力は、まず自分で獲得しなければなりません。人間は耐えることによって苦悩能力を獲得しなければならないのです⁵⁹。

このような苦悩能力は人間がもって生まれるものではなく、人生の中で獲得していく必要がある。したがって人生において苦悩することは必要不可欠ということにならざるを得ない。

にもかかわらず、近代においては苦悩を避けよう、苦悩から逃げようとする考え方が広まっている。

ところで、苦悩を恐れ、苦悩から逃げるばかりだったのが、この三世紀

⁵⁸ [LM, 203] [フランクフル 2004, 120]。

⁵⁹ [LM, 203] [フランクフル 2004, 120]。また次のようにも述べる。「さきに述べましたように、苦悩を受け入れることが大切なのです。苦悩を受け入れ、受容することができるためには、苦悩を志向する必要があります」 ([LM, 209] [フランクフル 2004, 136])。

です。現実を美化しようと試みてきたのです。……人々は、能動に夢中になって、受動を見落としたのです。現存在とは受苦であるということのを忘れたのです⁶⁰。

4.2 シュタイナー

フランクが苦悩を重視する態度は一貫している。これに対しシュタイナーの場合、フランクのように、つねづね苦悩の意味を強調しているわけではない。それでも「人生の苦悩から逃避し、苦痛に耐えようとしない人は、けっして叡智の基盤を創造することができません」などと述べており⁶¹、フランクと同様、苦悩に耐えることに大きな意義を認めていることは間違いない。

シュタイナーの著作の中に、日常生活の中ですぐに活かせるような実践的なアドバイスを行っている章がある⁶²。そこでは我々が克服すべき性質が多々挙げられているが⁶³、その中で最初に挙げられ、特に詳しく語られているのが忍耐 (Geduld) である。フランクが語る「苦悩に耐えること」と、シュタイナーが語る「忍耐」は、言葉の意味だけから考えても重なる部分が少なくないはずである。

ただしシュタイナーは忍耐、あるいは苦痛に耐えることそのものに意味があるといった説明はしていない。例を示そう。

たとえば、誰かが私たちが侮辱したとします。……このとき、すぐに次のような思考が現れます。「このように侮辱されたからといって、私の価値はまったく変わることはない⁶⁴」。

⁶⁰ [LM, 209] [フランク 2004, 136]。

⁶¹ [TR, 75] [シュタイナー1985, 84]。

⁶² 章のタイトルは「実践的な観点 (Praktische Gesichtspunkte)」([WEHW, 76-85 : シュタイナー2001, 95-111])。

⁶³ 「私たちが克服しなくてはならない性質には、怒りや不機嫌のほか、臆病な心、迷信、偏見を好む心、虚栄心、名誉欲、好奇心、必要のないことを何でも人に話したがる気持ち、人間を外面的な地位や性別や血縁関係をもとに差別する態度などがあります」([WEHW, 80] [シュタイナー2001, 104])。

⁶⁴ [WEHW, 77] [シュタイナー2001, 99]。

ここで語られているのは、侮辱された場合でも心穏やかでいることである。忍耐によって、そのような状態を持続することが推奨されている。そして同様のことが、別の個所では平静（Ruhe）として説明されている。

過去の習慣に従って、いままであなたのなかで波打っていた思考をすべて、静めなさい。内面において完全な平静さを保ち、沈黙し、辛抱強く待ち続けなさい⁶⁵。

もちろんこの場合、あらゆる侮辱をただ受け入れるのではなく、あたかもその侮辱が自分以外の人間に（侮辱に対して応酬する正当な理由がある人間に）加えられたかのように、平静で落ち着いた気分で自分自身の人格と向きあい、侮辱に対して応酬することが大切です⁶⁶。

ここで推奨されているのも心穏やかでいることであって、苦痛に耐えることそのものではない。人は他人から傷つけられれば、その人に対して怒りが生じる。困難な状況に落ちれば他人を、あるいは運命を呪いたくなる。そのような状況で心穏やかでいることをシュタイナーは推奨している。

シュタイナーは、自分を他人であるかのように観察することで平静が実現しやすくなるとし、そのような訓練をすることを勧めている。

……私たちは、自分ではなく誰かほかの人が体験したり、行為したりしているようつもりになって、みずからの行為や体験を眺めたり、それに対して判断を下したりしなくてはなりません⁶⁷。

ある人が運命の打撃に見舞われるとします。このときその人は、知人が同じような運命の打撃を体験するのをかたわらで見ているときとは、

⁶⁵ [WEHW, 82] [シュタイナー2001, 107]。

⁶⁶ [WEHW, 77] [シュタイナー2001, 100]。

⁶⁷ [WEHW, 27] [シュタイナー2001, 22]。

まったく異なった感じ方をするはずです。自分自身が不幸な目にあうとき、私たちが、ほかの人間が不幸に見舞われるのを見ているときはまったく異なった感じ方をするとしても、誰も、そのことを不当なこととは見なさないはずです⁶⁸。

自分が当事者であれば、そのような状況において平静のままに居ることは難しい。ただし、これを第三者であるかのように受け止めることができれば、平静のままに居ることが可能だという。そしてそのような境地に達することができれば、それによって得られるものは非常に大きいということが強調されている。

……誰かが自分を傷つけたり、怒らせようとして口にする言葉を耳にするとします。……その言葉が自分の内面に入り込んでくる前に、自分を傷つけたり、怒らせたりする刺を抜き取ることができます⁶⁹。

たとえば、待たされると、すぐいらいらする傾向のある人がいるとします。……するとその人は、平静の時間に、「どんなに焦燥感に駆られても無駄である」という感情を自分のなかに十分に浸透させることによって、その後は焦燥感を体験するたびに、すぐにこの感情をよみがえらせることができるようになります⁷⁰。

このような説明を読むと、ここでは苦悩することではなく、むしろ通常なら苦悩するような状況において苦悩をせずに済ませる方法を語っている、と理解することもできる。つまり「苦悩すること」ではなく「苦悩しないこと」「苦悩を軽減すること」を語っているという理解である。もしもそうだとすれば、フランクルとシュタイナーが語っていることは、むしろ正反対ということにもなりかねない。

⁶⁸ [WEHW, 27-28] [シュタイナー2001, 22]。

⁶⁹ [WEHW, 30] [シュタイナー2001, 26]。

⁷⁰ [WEHW, 30] [シュタイナー2001, 26]。

仮にそうだとした場合、ここでシュタイナーが「平静」として語るような境地にいきなり達することは常識的に考えて不可能だろう。そのための訓練を積むとしても、実現のためには非常に長い年月が必要と考えられる。だとすればそこに至る過程においては、苦悩すること、苦悩に耐えることがどうしても必要になる。そのような経験なくして「平静」という境地にいきなり達することができるとは考えにくい。

一方でフランクルの場合も、苦悩能力が増してくれば、シュタイナーが語るような境地に達する可能性は十分にあると考えられる。そしてフランクル自身が、そのような境地に達していた（あるいは近づいていた）可能性は否定できないようにも思われる。

このようなことからすれば、フランクルが語る「苦悩」とシュタイナーが語る「平静（あるいは忍耐）」には、重なる部分が大きいといえるのではないだろうか。

5 楽観主義と悲観主義

フランクルとシュタイナーの立場を、本稿のタイトルでもある楽観主義・悲観主義にあてはめるとすれば、どちらになるだろう。

これまで見てきたように、両者とも悲観主義的立場に対しては厳しい批判をしており、その立場が誤りだと明確に否定しているように見える⁷¹。そのため、少なくとも悲観主義ではないということまでは推測できる。では両者の立場は楽観主義といえるだろうか。

最善説と呼ばれるような比較的厳密な学説はあるものの⁷²、一般に使用される意味での楽観主義は、その内容があいまいである。したがって両者が楽観主義かどうかについては、その定義の仕方によって異なる（定義の仕方によって、どちらともいえる）ということにならざるを得ない。

本稿の冒頭で述べたように、一般に楽観主義は「人生には快が多いと考える立場」、悲観主義は「人生には不快が多いと考える立場」と捉えられている。

⁷¹ 本稿 3 を参照。

⁷² 一般に「最善説」と「楽観主義」はいずれも、同じ Optimismus の訳語である。

るように思われる。このように楽観主義・悲観主義は、快・不快と関連づけて語られることが圧倒的に多い。

しかしこれまで見てきたように、フランクもシュタイナーも快・不快をさほど重視していないし、それに基づいて人生を論じること自体が間違いだと考えている。したがって楽観主義・悲観主義を快・不快に基づくものと捉えるならば、両者はいずれの立場にも組していないと判断せざるを得ない。

では楽観主義・悲観主義を、快・不快と直接には関連づけずに考えてみたらどうだろうか。ここで楽観主義および悲観主義という言葉を(本稿で論じてきた内容に沿う形で)、それぞれ「人生あるいは未来に希望を見出す立場」「人生あるいは未来に(さほどの)希望を見出さない立場」といった意味に捉えてみよう⁷³。前者を「人生を生きるに値するものとする立場」、後者を「人生を生きるに値しないものとする立場」といってもよいかもしれない。楽観主義・悲観主義をこのように捉えるならば、フランクとシュタイナーは、いずれも楽観主義の立場に立つということができると思われる。

管見の限りでは、フランクもシュタイナーも、自らの立場を楽観主義だと明言しているわけではない。とはいえ両者とも、どんな人生にも意味があると考えている。したがって「人生あるいは未来に希望を見出す立場」といった意味であれば、楽観主義の立場を取っている(少なくとも「楽観主義的な立場を取っている」と判断しても差し支えないと思われる⁷⁴。

別稿で明らかにしたように、両者の思想の根底には「人間(人類)は経験を重ねることによって向上・進歩・進化する」という考えが存在する⁷⁵。この事実も、両者が楽観主義的立場に立っていることの傍証になるだろう。ただし両者とも、向上・進歩・進化は本人の経験(特に苦悩の経験)や努力によるものだと考えている。何の努力もせず、時の流れと共に(いわば自動的

⁷³ もとより両者は対立する立場ではあるが、両者を区分する明確な区切りがあるわけではないし、またその中間的な立場があっても一向に差し支えない。したがって上記のような、あいまいな表現になるのはやむを得ないと考える。

⁷⁴ もちろんこのようなことは、楽観主義・悲観主義をどう定義するか、どのような性格づけをするかによって結論は異なってくる。

⁷⁵ [寺石 2018]。フランクは「私たちは、悲観主義的になったのです。私たちは、もはや進歩そのものを信じていません」と語っている([SWL, 82] [フランク 1993, 8])。フランクも、進歩を信じる立場を楽観主義と捉えているらしい。

に) 向上・進歩・進化すると考えているわけではない。つまり誰にでも明るい未来が約束されているといった主張をしているわけではない。

また両者とも、あらゆる人にとって人生が(あるいは世界が)そのようにできていると考えているわけではなく(すなわち「どんな人にとっても人生には希望がある」と考えているわけではなく)、どのような人生を歩むかはあくまでも本人次第という立場を取っていることには、十分な注意が必要である⁷⁶。

むすびとして

シュタイナーと فرانクルの楽観主義と悲観主義、およびそれと密接に関連する快、苦悩、平静などに注目して、両者の思想を比較考察してきた。最後に主なポイントだけ繰り返しておこう。

一般に、楽観主義・悲観主義は快・不快と関連づけて捉えられることが多い。これに対し両者は、快・不快に基づいて人生を考えること、より具体的には快を目標として捉えること自体が誤りだとしている。そして両者とも、快は結果として生じるものであり、目標ではないとしている。快・不快の比較については両者とも、比較自体は可能かもしれないが、人間の行動には影響を与えないと主張している。

フランクルは日頃から苦悩の重要性を指摘している。苦悩を経験すること、苦悩に耐えることによって人間は成長すると考えている。これに対しシュタイナーは平静の重要性を指摘している。平静とは「苦悩」ではなく、むしろ「苦悩しないこと」「苦悩をせずに済ませること」を語っていると理解することも可能である。とはいえそのような境地にいきなり達することは常識的に考えて不可能である。そこに至る過程においては、苦悩を経験すること、苦悩に耐えることがどうしても必要になる。このようなことからすれば、フランクルが語る「苦悩」とシュタイナーが語る「平静」には、重なる部分が大いといえそうである。

⁷⁶ この点は両者の「自由」をめぐる考えと密接に関わる。詳しくは稿を改めて論じたい。

フランクフルトもシュタイナーも、自らの立場を楽観主義だと明言しているわけではないが、両者とも悲観主義的立場に対しては厳しい批判をしている。両者とも快・不快をさほど重視していないことから、楽観主義・悲観主義を快・不快に基づくものと捉えるならば、両者はいずれの立場にも組していないと判断せざるを得ない。ただし楽観主義・悲観主義をそれぞれ、「人生あるいは未来に希望を見出す立場」「人生あるいは未来に（さほどの）希望を見出さない立場」といった意味で捉えるならば、両者とも楽観主義の立場を取っていると判断しても差し支えないと思われる。

略号と参考文献

- ・ 本稿では引用に際し、文意を損なわない範囲で手を加えることがある。（ルビを省略する、傍点を省略する、字間開けを省略する、漢数字を算用数字に改める、改行を無視するなど。）
- ・ 邦訳には注に示した訳書を用いることを原則とするが、訳語や文体の統一などを目的として筆者が訳し直すことがある。また文意を明確にするために原語を補うことがある。

1. R. シュタイナーの著作・講演

シュタイナーの著作・講演（のうち記録が残されているもの）はすべて Rudolf Steiner Verlag 社の全集（Gesamtausgabe, GA）に収録されている。本稿では原則として、この全集に基づく同社の小型版（Taschenbuch, Tb）を使用。

PF = *Die Philosophie der Freiheit: Grundzüge einer Modernen Weltanschauung, Seelische Beobachtungsergebnisse nach naturwissenschaftlicher Methode* (GA4). 初版は 1894 年。Tb627 の 2005 年版（邦訳は〔シュタイナー2017〕）を使用。

TR = *Die Theosophie des Rosenkreuzers* (GA99). 1907 年の講演。Tb643 の 2005 年版（邦訳は〔シュタイナー1985〕）を使用。

WEHW = *Wie erlangt man Erkenntnisse der höheren Welten?* (GA10). 1904～1905 年に雑誌に連載。初版は 1907 年。Tb600 の 2005 年版（邦訳

は〔シュタイナー2001〕を使用。

2. V. E. フランクルの著作・講演

ÄS = *Ärztliche Seelsorge, Grundlagen der Logotherapie und Existenzanalyse*. 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。1982 年まで大幅な加筆・修正が行われ、分量的にほぼ 2 倍になっている。dtv Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG 社の 2015 年版、6.Auflage (邦訳は〔フランクル 2011〕)を使用。

HP = *Homo patiens: Versuch einer Pathodizee*. 初版は Franz Deuticke 社、1951 年。UM と合冊され LM になる (1975 年)。LM を参照。

LM = *Der leidende Mensch: Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie*. HP と UM の合冊 (1975 年)。1984 年に増補改訂。Verlag Hans Huber 社の 2005 年版、3.Auflage (邦訳は〔フランクル 2000〕〔フランクル 2004〕)を使用。

SWL = “Von Sinn und Wert des Lebns.” 1947 年の講演 “...Trotzdem Ja zum Leben sagen” を 1981 年に改訂したもの。R. Piper 社の *Die Sinnfrage in der Psychotherapie*, 1988 年版、3.Auflage (邦訳は〔フランクル 1993〕)を使用。

TJLS = *...trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslagerer*. 初版は Franz Deuticke 社、1946 年。Kösel-Verlag 社の 2015 年版、7.Auflage (邦訳は〔フランクル 2002〕)を使用。

UM = *Der unbedingte Mensch: Metaklinische Vorlesungen*. 初版は Franz Deuticke 社、1949 年。HP と合冊され LM になる (1975 年)。LM を参照。

3. その他の文献

シュタイナー1985 : シュタイナー, ルドルフ (西川隆範訳)『薔薇十字会
の神智学』平河出版社

シュタイナー2001 : シュタイナー, ルドルフ (松浦賢訳)『いかにして高
次の世界を認識するか』柏書房

シュタイナー2002：シュタイナー，ルドルフ（高橋巖訳）『自由の哲学』ちくま学芸文庫

シュタイナー2016：シュタイナー，ルドルフ（森章吾訳）『ゲーテ的世界観の認識論要綱』イザラ書房

シュタイナー2017：シュタイナー，ルドルフ（森章吾訳）『自由の哲学』イザラ書房

寺石 2016：寺石悦章「シュタイナーとフランクフルト 比較の試み」（『人間科学』第35号所収）

寺石 2017a：寺石悦章「シュタイナーとフランクフルト 精神と心魂をめぐつて」（『人間科学』第36号所収）

寺石 2017b：寺石悦章「シュタイナーとフランクフルト 死と不死をめぐつて」（『人間科学』第37号所収）

寺石 2018：寺石悦章「シュタイナーとフランクフルト 再生をめぐつて」（『人間科学』第38号所収）

フランクフルト 1993：フランクフルト，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳訳）『それでも人生にイエスと言う』春秋社

フランクフルト 2000：フランクフルト，ヴィクトール・E.（山田邦男監訳）『制約されざる人間』春秋社

フランクフルト 2002：フランクフルト，ヴィクトール・E.（池田香代子訳）『夜と霧（新版）』みすず書房

フランクフルト 2004：フランクフルト，ヴィクトール・E.（山田邦男・松田美佳訳）『苦悩する人間』春秋社

フランクフルト 2011：フランクフルト，ヴィクトール・E.（山田邦男監訳）『人間とは何か——実存的な精神療法』春秋社

諸富 1997：諸富祥彦『フランクフルト心理学入門——どんな時も人生には意味がある』コスモス・ライブラリー

諸富 2016：諸富祥彦『知の教科書 フランクフルト』講談社選書メチエ

山田編 2002：山田邦男編『フランクフルトを学ぶ人のために』世界思想社